

中世の煮炊き具

古代に土製甑は消滅

奈良時代から平安時代にかけてもカマドと甑、甑は煮炊きの主要調理設備・調理具として使用され続けたと考えられますが、山口県内では平安時代（9世紀）以降竪穴式住居が姿を消すため、地上構造物であるカマドは住居廃絶時に破壊されるためか確認できなくなります（註1）。

土製甑も8世紀代には姿を消しますが、これは木製甑に姿を変えたものと推定されています。山口県でも平安時代まで長胴の土師器甑が存在することから、古墳時代中期以降変わらない方法で煮炊きがおこなわれていたのでしょう。

中世以降、調理場と煮炊き具が分化

平安時代、大陸から鉄製羽釜（はがま：胴部にツバのつく煮沸容器）が伝わったことにより、カマドにかける煮沸容器が甑から羽釜（一般民は鉄製羽釜を模した土製羽釜を使用）に変化します。一方、山口県では羽釜の導入が遅れたようで、鍋形土器の口縁にツバをつけた羽釜が出現するのは鎌倉時代（13世紀頃）のようです。

中世以降は全国的に家屋が平地式となるため、遺跡調査で調理場を検出するのは困難になります。寺院や大規模な屋敷では、居住施設とは別に調理用の施設が設けられるようですが、一般家屋の状況は不明確です。

中世の絵巻物などを見ると、囲炉裏などは屋内の板間に、カマドは屋外に設けられるのが一般的だった可能性があります。調理具としては、前者で鍋（山口県では五徳（ごとく：熱源の上に置き、鍋やヤカンなどを置く道具）と一体化した足鍋（あしなべ）と呼ばれる土器が広く用いられます）や茶釜（ちやがま：茶に利用するための湯を沸かす釜）が、後者では鉄製や土製の釜が用いられたと考えられます。

江戸時代以降は、カマドが屋内の土間に設けられ、昭和前半までその光景は維持されることになります。

註1 東日本では平安時代まで竪穴式住居が用いられており、カマドも確認されています。